

2題

リポーター
渡辺 政美さん (旭ヶ丘)

雑誌「文芸春秋」九月号のコラム「目・耳・口」に『運転手は女性だけというタクシー会社が秋田県大館市に誕生、(中略)女性ならではの心配りときめ細かいサービスがモットーという。高齢者の多い地域性をとらえ、お年寄りや通院患者を客層の中心としている。(中略)お年寄りを病院の玄関まで手を引いて連れて行ってあげるといった小さな親切が好評で、地域からのエールを受けている』という一文を目にした。

また、九月十一日の朝日新聞のコラム「天声人語」に『運転手が女性だけ、というタクシー会社とバス会社が相次いで生まれた。タクシーは秋田県大館市で、バスは東京・渋谷でどちらも七月から走っている。▼(中略)まず、タクシー。JR大館駅前から、電話で車を呼ぶ。行き先を告げると、千円未満の近距離だった。「わざわざ来てもらったのに、近くて悪いね」というと「とんでもない。乗っていただけだけで光栄です」▼目下、運転手は八人。市民病院やスーパーマーケットで客待ちをす。病人やお年寄りの手を取り、荷物を運ぶ。みな生き生きと仕事に向かっている。彼女たちは一人を除いて家庭人だ。だから勤務時間は個人の事情が優先される。夕方には帰宅する人が目立つ。日曜と夜十時以降は営業しない。▼次はバス。渋谷駅前から住宅街の狭い路地を巡る。二十六人乗りのミニバスだ。(中略)そして大館市のタクシーの車内にはこうあった。『私たちは当たり前前の挨拶とサービスのできる普通の会社を目指します』▼その通り。(中略)女性だからできるのではない。これが自然な接し方なのだ』と。

期せずして、全国を網羅する雑誌・新聞に取り上げられたことはニュース性があることであり、リポートしてみることにした。

「運転手が女性だけというタクシー会社」を訪ねて

先日、大変お忙しいところを、中嶋社長さんに直接お会いし、貴重なお話を伺うことができた。社長さんはお父さんの急逝により、志半ばにして急に帰郷され、会社を継いでお仕事をなされておられるとのこと。若い経営者としてこの度の発想などを含めて伺った要点を記してみた。

(1) 9年前まで旅行代理店で働いていたが、帰って来てやってきたことと随分違っていた。あいさつもしない、礼も言わないのが現状だった。それで、あいさつを商店のように、当たり前になれないかと常々思っていた。

(2) 現在の会社が3月の認可の時点で、ゼロからの出発。考えていたことを実行しようと思った。
・ あいさつをする
・ 行き先を確認する
・ 金をもらったら礼を言う

当たり前前のごとをやらないと、お金をもらう資格がない。このことは面接のときから話した。

(3) 未経験者なら理想の運転手になるだろうと考え、二種免許を取らせることから始めた。当たり前前の会社という発想から、その手段として女性だけということになった。二種免許を取れる能力があれば年齢制限は設けない。(4) 深夜は営業しない。勤務時間は個人の申告制で、働きやすい環境作りを考慮している。女性の雇用の場の一つとしたい。

(5) 車内にある言葉は、社長さんの日ごろの思いとのこと。それは「当たり前前であいさつとサービスのできる会社を目指します」他の企業にも行政にとつても大変大切なことを示唆しているように思えた。今後も各業界とも連携して、よりよい「市民の足」になるよう努力したいとのこと。



タクシー会社の中嶋社長